

Possibility and Impossibility of the Notion of Care as Responsibility

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: MURAI, Naoko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3848 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



応答としてのケアの可能性と不可能性 —教育責任についての試論—

児童学部 児童学科 村井 尚子

要旨：親や教師として我々は、なぜ子どもをケアするだろうか。ヴァン＝マーネンはそれは非媒介的で直接的な出会いによるとし、その契機をレヴィナスの「顔」の到来という理論によって読み解く。レヴィナスによれば、他者との出会いは、その人の「顔」を見ること、私を呼ぶその人の声を聞くことである。そのことによって私は、不可避的に応答することを迫られる。つまりケアする責任を感じるのである。しかしデリダによれば我々は、いつときには一つのこと、一人の他者のことしかケア（気にかけることが）できない。他の多くのケアを必要としている他者への責任を担えないという事実は、我々に倫理的痛みをもたらす。しかし、ヴァン＝マーネンはその痛みこそを大切にす。教師は特定の生徒の「顔」に向き合っていると感じ、その生徒について気にかけているからこそ、自分が責任を負っている多くの、ときに「顔のない」他の生徒すべてに対して繊細でいられるのである。

キーワード：レヴィナス、倫理的痛み、「顔」、責任、デリダ、ケア

はじめに

別稿「気がかりとしてのケア」において、我々の教育的日常に気がかりとしてのケアが貼り付いていること、言い換えれば、気がかりとしてのケアによって我々が親であり続けるという事態をハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の「Sorge 気遣い」を手がかりとしながら明らかにしてきた。そこでは、「教育は気がかりとしてのケアリングについての実践的かつ反省的な倫理に基づくディシプリンである」という定式化がなされた。そして、教育は「子どもはケアされなければ育たないという気づき」から始まる。しかしそれでは、我々は何故子どもをケア（ケア＝気がかりとケア＝世話の双方の意味において）しようとするのだろうか。ヴァン＝マーネン (Max van Manen, 1942-) によって慢性の病とも喩えられる痛みを伴うケア＝気がかりをなぜ我々は「引き受ける」のだろうか。

本稿では、ケアする責任の根源をまずエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas, 1906-1995) の思想を元に読み解いていく。レヴィナスは「顔」との出会いによって我々は応答することを迫られると述べた。しかし我々は親として、教師として自らが対峙する子どもの「顔」に向き合い、その責任を果たすことを享受するかもしれないが、教師や一人の大人として、児童や生徒に対して、さらにいえば世界の中に投げ出され、大人へと向けて育ちつつある子ども達全てに対

して責任を引き受けることはできない。ケアを気がかりとして捉えるかぎり、一度にケアできるのはせいぜい一人か数人にすぎないのである。これに対してヴァン＝マーネンは、「顔のないものへのケア caring for the faceless」という独自の構想を打ち立てる。目の前に現前しない子どもに対してケアする責任を担い得るのは、ユニークな、顔のある、現前しているこの子どもからの呼びかけに応答できるからなのだ。本稿は、ヴァン＝マーネンがレヴィナスとジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) の所論を援用しつつ試みているこの構想の検討を行う。

教育責任は、ドイツの精神科学的教育学において主に主題的に取り扱われてきたテーマであるが、二つの責任性がドイツ教育学では主題となってきた。例えば、解釈学的教育学の研究者として我が国でも翻訳があるヘルムート・ダンナー (Helmut Danner, 1941-) は『責任と教育学』において教育責任を定義し、その代理の責任としての特質を明らかにしている¹⁾。またダンナーも大きな影響を受け、ヴァン＝マーネンがその師としているランゲフェルト (Martinus Jan Langeveld, 1905-1989) は大人と子どもの違いを、責任から免除されているか否かによって峻別している²⁾。責任は教育の過程と目標との双方に関わってくるのである。

ケアの倫理から責任性へと論を展開している先行研究としては、品川の『正義と境を接するもの』が挙げ

られる。品川の研究はケアリング論を倫理学の分野に持ち込んだという意味で倫理学の領域においてその功績が評価されている。

レヴィナスの責任論に関しては多くの先行研究があるが、なかでも佐藤は『物語とレヴィナスの顔—「顔」からの倫理に向けて—』においてレヴィナスの倫理とギリガンのケア倫理学との架橋を試みている。本稿ではこれらの先行研究を参照しつつ、「顔のないものへのケア」という異なった視点からケアする責任性を論じ、その教育学的な意義を明らかにしていく。

1. ケアへの呼びかけ

1) なぜケアするのか

我々はなぜ他者をケアするのであるのか？ 我々が子どもをケアし、大人に向けて教育するのは、結局は種の保存のための遺伝子の働きのみによる要因が帰されるものなのだろうか？ 進化論的な説明のように、子どもをケアする種族のみが他の種族を凌駕し、現在に至るまで人類として繁栄を続けてきているゆえだろうか？

このことについて考察するために、まずは、ケアの最も根源的な相としての生まれたばかりの赤ん坊に対するそれについて考えることにしよう³⁾。生まれたばかりの赤ん坊は、自分一人では栄養を摂取することも生命維持に必要な体温を保つことも出来ず、絶対的に周囲の助け＝世話としてのケアを必要とする存在である。赤ん坊は、それまで護り育まれていた母親の子宮から世界へと生み出される。そのとき子どもは「支えられていない、あるいは安全な基盤としての防護がない、そのような分離と喪失の世界経験⁴⁾ (RLE60、訳100)」をしている。が、それだけに赤ん坊の世話はまさに骨の折れるものであり、全人格を投入して事に当たるほどの重大な仕事である。にもかかわらずなぜ我々は、親として赤ん坊をケアする、そして親や教師やその他の子どもに関わる専門家としてこれから子どもが自立するまでの長い時間に亘ってケアしていく責任を担うのだろうか。

父親がその責任を引き受ける仕方を、ランゲフェルトは「決心」、マルセル (Gabriel Marcel, 1889-1973) は「誓約」と名づけている。これに対してヴァン＝マーネンは、責任はそのような能動的な決意によって引き受けられるものではないと反論する。責任は、子どもを自分の腕に抱いたとき、子どもを受け容れ包容するその仕草の中に「責任性」や何か全く新しいものに直面している自分に気づいたときに、経験的にそこに

あるものだと主張するのである (RLE91、訳 148-149)⁵⁾。それは、存在論的な「呼びかけ」として経験される出会いの一種であると。

2) ケアへの呼びかけ

新しく親になったものは、子どもからの呼びかけを聴く。この呼びかけは、呼びかけられているという抗し難い感覚を我々にもたらし、我々は呼びかけに耳を傾け、そして「まるでその目的を知っているかのように」行動してしまう。「不安におののきながら、多分、最初は畏敬の念を抱いて、そして、おそらく敬愛の念やアンビヴァレントな思いとともに」受け容れるか否かを判断する以前にすでに受け容れているのである (PD 訳 113)⁶⁾。このように我々は生まれたばかりの赤ん坊からの呼びかけを聴き、それに対して応答する。そこには応答しよう、受け容れようと「決心」したり「誓約」したりする余地はない、そういった能動を排除したあくまで受動的なものとしての「責任性」がそこには生じている。

この「呼びかけ」をヴァン＝マーネンはいかに説明しようとしたか。1982年に *Curriculum Inquiry* 誌に掲載された論文「現象学的教育学 phenomenological pedagogy」では、「呼びかけているのは呼びかけそれ自体」あるいは「教育が呼びかける」と述べられている。上に見たようにこの呼びかけを聴く私は「呼びかけられているという抗し難い感覚」をもち、私はすでに行動を起こさせられるという事態において了解される (PD 訳 113)。この説明には、良心からの呼びかけを論じるハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の影響が見てとれよう⁷⁾。

一方、これに対して2000年の論文「道徳的な言葉と教育的な経験 moral language and pedagogical experience」にいたっては、「他者からの呼びかけ」をレヴィナスの「顔」からの呼びかけとして読み解く試みへと変化していく⁸⁾。「他者と出会うことは、レヴィナスが論じるには、その人の顔を見ること、私を呼んでいる声を聞くことである⁹⁾ (ML320)」と。次章では、レヴィナスの議論に則りつつ、この試みについて明らかにしていきたい。

2. 「顔」と責任

レヴィナスは、他者を前にして私に上のような倫理的対応が求められていることを感じる事態を「顔」という彼独特の概念によって論じていく。ヴァン＝マーネンは、レヴィナスの議論を限定的な仕方を受け入れ

ようとする。「私のケアを必要とする他者からの訴えへの人間的な応答性として彼（レヴィナス）が描写する倫理的な衝撃の意味を把握できるのは、直接的で非媒介的な出会いにおいてのみ（ML319）」であると。この文章において示されているのは、レヴィナスの他者論における他者の絶対的な他者性や無限責任については追従しないという意であると考えられる。まずはレヴィナスの「顔」の理論から考察を進める。

1) 「顔」の到来

ヴァン＝マーネンは、対応が迫られる倫理的な状況を例に挙げて考察を進める。「我々がたまたま傷ついたり救いのない子どもに触れたとき、あるいは突如として自分の目の前に人が倒れているのを目にするという状況」において、我々は「他者を召命、あるいは訴えとして」経験することもあり得る。そしてこの状況において私は、「自分の意図や思考に媒介されない直接的な応答を感じる（ML320）」。「苦境にあるこの子ども、この倒れている人は、突如私の前に他者として出現する。そして、「責任がある（応答可能である）responsibleと感じようと欲するより前に、私は責任がある（応答可能だ）と感じざるを得ない（ibid.、強調は原著者）」。

この状況はレヴィナスで言えば、「顔」の到来である。苦しんでいる他人を前に、その人を助けなければならぬと感じるとき、私は「顔」を感じている。顔は私に「あなたは殺してはならない（TI、訳(下)41)¹⁰⁾」と訴えかける。これは他者の最初のことばである。他者の苦しんでいる「顔」を目の前にしたとき、私には当為が課される。しかもこの顔は、有無を言わせぬ仕方私に一方的に到来する。その訴えを耳にしまった以上、私にはその訴えに対して耳を塞ぐことはできない（TI、訳(下)44）。ここにおいて私には他者のために行為する責任が課されるのである。

作田は、レヴィナスの言う他者に備わるこの強要する性格こそが、主体との関係において特徴的であると述べる。そしてこの「魅きつける力」をラカン（Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-1981）の理論との親和性を前提とした「ファルス」であると規定する。他者との出会いは意識的な自由選択以前に生じているので、私は悲惨な他者から目を背けて立ち去ることはできない。他者の救いを求める叫びに応答しないのでそのかたわらを通り過ぎたとしても、応答を拒否した事実が残るのであるし、我々が我が身を防衛するための能力を自由に行使することは他者に対する暴力を意味することになる。他者は私に暴力を加えることによ

て力を行使するのではなく、暴力をこうむって死に瀕しているそのことが、私を他者へと向かわせるファルスを与えている¹¹⁾。

2) 選び＝人質

しかも、出会われるものとして他者に選ばれたのは、他でもない私なのである。

「他者はたまたま遭った誰かであるだけでなく、この人が私の責任性を呼んだのだ。より強い言い方をすれば、この人は私を人質に取ったのである。そしてこのジェスチャーにおいて私は、また自分のユニークさを経験する。私はそれが私に向けられたものかを確かめるために辺りを見回す必要はない。私は責任を感じた、そのことが重要なのである。私がある人であり、この声は私を呼んでいる（ML320、強調は原著者）」。

私は選ばれた。この応答すべきものとして選ばれた私のことをレヴィナスは第二著書『存在の彼方へ¹²⁾』において、「人質」あるいは「身代わり」と名づけている。

「犠牲とは人質として指名されることであるが、人質は自分を人質として選ぶのではない。人質として選ばれることがあるとしても、選び手はあくまで<善>であり、それゆえ、この選びは選ばれた者の意志に基づくことも、選ばれた者によって引き受けられることもない（AQE、訳 51）」。「選ぶのは<善>、<無限者>、あるいは「神¹³⁾」とも言い換えられているが、ともかく私は、この目の前に顔を曝している他者を救うものとして、他者の身代わりになるものとして選ばれたのである。「身代わりになるのはこの私である。私は隣人の身代わりになるが、この身代わりは私固有のものとして生起する（AQE、訳 290）」。

この「人質」ということばの峻厳さにヴァン＝マーネンは疑問を投げかける。「人質とは単なるメタファー的な言い回しではないのか？ 人生においてそのような経験をするとはいえないこともあるのではないのか？」と。その上で、この言葉の重みを受け取る。「この小さくて弱い人、私を頼っている傷つきやすい子どもが、大きくて強い大人である私を人質に取っている（ML320）」。「通常であれば、強くて大きいものが弱くて小さいものに対して力を行使し、人質に取ると思われるのに、私に力を行使しているのはこの傷つきやすい子どもだ」というそのことの「不思議さ」に眼を見張る。

作田は、「他者は私に暴力を加えることによって力を行使するのではなく、暴力をこうむって死に瀕してい

るそのことが、私を他者へと向かわせるファルスを与えている」と述べていた。他者の絶対的な弱さが、逆説的にもファルスとなる。「もし、親である私が、ケアしない（まったく気にかけない）としたら、私は不注意にも彼や彼女をリスクと危険にむやみに曝すことになるだろう（ML320）」。

ヴァン＝マーネンのこの言葉は、子どもから眼を離して、迷子にしてしまうという状況を想定してみれば容易に得心がいくだろう。

3) 責任の回避不可能性＝受動性

顔の表出によって私に課された責任を、人質となった私は回避することができない。「語りにおいて私は<他者>からの問いかけにさらされ、応答することを迫られ—現在の鋭い切っ先によって—私は、応答することの可能性、[責任]として生みだされる（TI、訳（上）368）」。

また、「この責任は回避不可能である。顔によって拓かれる本源的な語りの最初の語は責務なのであって、どのような『内部性』によってもこの責務を避けることはできない（TI、訳（下）46）」と言われる。

このことをヴァン＝マーネンは「責任がある（応答可能である）と感じようと欲するより前に、私は責任がある（応答可能だ）と感じざるを得ない I cannot help but feel responsible（ML320）」と言っていた。

避けることができないかたちで顔は外部から到来し、私に思考や判断の余地を与えないのである。斎藤は、「応答可能性」を「応答しないことができない」と言い換える。「応答しない」という行為の否定的可能性のさらなる否定「……ことができない」は応答の「不可避性」となって姿を現すのだ¹⁴⁾。

「他者との出会いにおいて、その挨拶において、その顔において、我々は考えたり、感じたり、価値付けたり、反省したり、道徳的に意味付けたりと言った形式における一般倫理に巻き込まれる前にこの純粹倫理を経験しているのだ」（PST7）。純粹倫理は、一般倫理に先立つ。解釈や判断の余地をはさまない仕方では顔は到来するので、そこには能動の契機は含まれない。完全に受動的な仕方では我々は顔への責任を担わざるを得ないのである。

4) 無条件の責任性—解釈の不可能性

しかも、この倫理的義務はなんらかの条件を伴うものではない。「顔は、顔が裸形であることにおいて、貧しい者と異邦人が困窮していることを私に提示する（TI、訳（下）74）」。

佐藤によれば、顔は裸形であるゆえ、顔の備える何

らかの条件ゆえに倫理的義務が生じている訳ではなく、その条件が顔に先行して倫理的義務を基礎付けることにはならない¹⁵⁾。相手が貧しいから、異邦人だから、あるいは以前に恩義を受けたから顔を感じるのではない、そうではなく、顔を感じた、そのことによって私はその人のために行うという倫理的義務を負う。

教育学においてレヴィナスの責任論を取り上げるとき、この解釈の余地のなさが問題となるとも考えられる¹⁶⁾。子どもの置かれている状況を解釈する権能を重視する教育学と不整合を来すのではないかという疑義が生じ得るのである¹⁷⁾。

しかし、ヴァン＝マーネンが挙げている生まれたばかりの子どもからの呼びかけを聴く場面においては、解釈は不要だとも言えないだろう。あるいは新生児ならずとも、子どもが大人である自分に向かって腕を伸ばしてくるとき、この子どもの行動の意味を解釈して、それに応じた対応をすることはしない。ただ、求められるがまま、パトス的に応じるだけではないか。ヴァン＝マーネンは「知っている身体」という用語を用いてこの事態を説明しようとする¹⁸⁾。

さらに不可避的な応答が求められているこのような状況には、成長しつつある子どもと向き合っている我々の教育的日常においても出会われている。ヴァン＝マーネンが教育的状況 pedagogical situation あるいはその時間的な相を先鋭化させた教育的契機 pedagogical moment という概念において規定しているのは、解釈や理解といった猶予を与えない直接的、非媒介的な「即座の」行為が求められる状況—行為することが駆り立てられる状況—である。そこでは我々は、「何がこの子どもにとって善いことなのか」を考えるよりも前に、すでに子どもにとって善いと思われる行為を成してしまっているのである¹⁹⁾。このように、子どもからの呼びかけを聴く私にとって、責任は「引き受けられる」ものではなく、作田の言うファルス、「駆り立てられるもの」と言うべきなのかもしれない。

5) 絶対的な他性と無限責任

さて、上の点までにおいては、レヴィナスの責任論における受動性問題＝解釈の余地のなさが大きな齟齬を引き起こさないとも言えた。しかしながら、レヴィナスが挙げている例は自らが犠牲となって身を曝す極限的な状況であり、我々には無限の責任²⁰⁾が課されることとなる。しかもそこに想定される相手はあくまでも他者＝貧しい者、異邦人、寡婦、孤児（TI、訳（下）158）である。その他者は、絶対的な他性をもつ。

「語りをつうじて顔が私とのあいだに関係をとりむすぶとしても、顔はそのことで<同>のうちに組み入れられるわけではない(TI、訳(下)33)」。レヴィナスのいう他者はまったく自らの内に取り入れることが不可能な絶対的な他者である。それゆえ、顔の到来に際してその意味を解釈することは、レヴィナスによれば<他>を<同>へと組み入れ、所有することになってしまうためにあってはならないことになる。

このことを教師や親としての我々の日常に置き換えて考えてみるならばどのように説明できるだろう。自分の子どもだから、自分が担任をしているクラスの生徒だから責任を負う、そういうあり方とレヴィナスの議論とは原理的に相容れない。ヴァン＝マーネンを通して我々がレヴィナスに追隨できるのは、非媒介的、直接的な出会いにおける責任の契機という点までとすべきかもしれない²¹⁾。ただし、教師や親として自分の子どもやクラスの生徒をケアし、責任を担うということは、それ以外のケアを必要としている子ども全てに対して責任を負うことはできないという我々の実存的な痛みを引き起こす。この痛みについて、次章において引き続き考察が加えられることになる。

3. 「顔」のない他者と責任性

1) 倫理的な痛み

次に挙げられる例は、私に直接的な仕方で向き合っている訳ではない子どもからの訴えである。

「最近のセーブ・ザ・チルドレン基金のテレビのコマーシャルで、基金の女性が貧しい子どもを抱き上げ、我々視聴者にこう伝えている。『彼らの目を見てください。そして、もし彼らと顔を合わせたらするであろうことをしてください』と。彼女がこの言葉を訴えるまさにそのとき、子どもは振り向き、カメラを直接見つめる。いまや、我々はこの種のコマーシャルを思うだけで、もし本当にこの子どもの目を見、もし他のチャンネルにかえなければ、我々は不可思議な感覚を経験する。この子どもの目は私たちをこれほど直接的に見つめている。そして何が起るか我々が知る前に、彼らは私たちに(印象を)やきつける、そのあるがままに(ML320-321)」。

「(殺人に対する無限の抵抗は)無防備なその眼のまったき裸形のうちで煌めく(TI、訳(下)41)」とレヴィナスは述べているが、顔の中でもとりわけ我々に強く訴えかけてくるのは「眼」である。ブラウン管の中の飢えに苦しむ子どもの曇りのない瞳がまっすぐに私に向けられる。私は訴えを受ける。「我々はその顔に

傷つきやすさを見た。強い非難を(見た)。・・・我々は罪を感じる。負債を感じる。私達は責任を経験しているのだ(ML321)。

しかしこの場合、顔を前にしてもまだ私には行為の選択の余地が与えられていると言えなくはないだろうか。この基金に寄付をしようとするかもしれないし、今すぐ何もかもを投げうってこの子どもが窮状に瀕している地に赴き、この子どもを抱き上げ、この子の命を救うために行おうとするかもしれない。あるいは、そのときには強い仕方で負債を感じたとしても、ひとたびスイッチをオフにすれば、日常の些事に埋没し、この子どもの顔を忘れてしまうこともあるかもしれない。いや、最後の選択肢がもっとも現実的だと言えよう。目の前にいるこの子ども、生まれたばかりの赤ん坊の顔によって、我々がケアする責任に直面する事態と、アフリカの子どもとは顔の到来の位相が異なるとも言えるだろう。それゆえこの状況は、レヴィナスの他者との出会いとは言えないのかもしれない。しかし、ヴァン＝マーネンは、これこそが「レヴィナスが他者の他者性に向き合わされていると述べていること(ibid.)」なのだと言い切る。

ここで私は、自分との相互関係にある自己としては他者に会ってはいない。にもかかわらず、「私は自分自身を超越した者と、その真の他者性において出会う(ibid.)」。この「真の他者性」をいかように解釈すべきであろうか。

ここで再び作田の議論に立ち戻ろう。作田は、「他者との出会いは意識的な自由選択以前に生じているので、私は悲惨な他者から目を背けて立ち去ることはできない。他者の救いを求める叫びに応答しないでそのかたわらを通り過ぎたとしても、応答を拒否した事実は残る」と言っていた。問題なのは、テレビの中のアフリカの子ども「顔」を見て、「私が」負債を感じたこと、「私が」選ばれた、そのことである。にもかかわらず、私は(たとえ寄付をしたとしても)この子どもが窮している状況を変えることができないのだ。ヴァン＝マーネンはここに「真の他者性」を見ていると考えられる。なすすべがない、その痛みこそが鍵なのである。このなすすべのなさ、ケアする責任を引き受けた時に我々が感じる気がかりという慢性の病にもまして、我々を苦しめる。この「倫理的痛み」がしかし、我々を他者の現前へと向かわせる敏感さへと駆り立てるのである。次節ではこの点を明らかにしていきたい。

2) 顔のない他者への責任

ここまで顔が我々に訴えかける責任について考察が続けられてきたが、ここからはレヴィナスを離れ、デリダがキルケゴール (Søren Kierkegaard, 1813-1855) の『おそれとおののき』について論じている部分が引用されている。

モリヤ山の頂上でアブラハムは自らの最愛の息子、ただ一人の息子を殺せという神の命令に従うことを求められた。アブラハムは神の命を信じて疑うことをしなかった。彼は息子に向かって刀を抜いた²²⁾。デリダはこのキルケゴールの記述を引き受け、我々が一人の人を心配することで、他のあらゆる人への責任を放棄してしまっているという痛みを抱えているということを指摘する。『死を与える』の中でデリダは自らの責めについて次のように述べている。

「たとえそれに時間をかけ、注意を払ったとしても、いまこの瞬間にしていることを選ぶことによって、そして自分の仕事、市民としての活動、教師としての、職業としての哲学の活動を選ぶことによって、(たまたまフランス語である) 公用語を書き、話すことによって、私はおそらく義務を果たしているのだろう。だが他のすべての責務をおのおのの瞬間に裏切り、犠牲にしている。私が見知らない、あるいは私が知っている他の他者たち・・・私が私的に愛する人たち、私の近親者、家族への、そして息子たちへの忠実さや責務を裏切っている。私の息子たちのおのおのは唯一の息子であり、一方を他方ゆえに犠牲にする。私たちの毎日の、そしておのおのの瞬間における住まいであるモリヤの地において、一方を他方のために犠牲にしているからだ²³⁾」。

我々はいま、この場所で、この生活を選び取ることによって、テレビ画面の中で訴えを投げかけているアフリカの子どもを抱き上げてその子を救おうとする行為を犠牲にしている。アフリカの子どもだけでなく、世界中のケアを必要としている他者を犠牲にしている。

「私たちはこの呼びかけを心に留める必要があるし、そしてそれでも他方で彼の問いかけの戦略はそこにはない全ての人に責任をもつこと、そして私たちにケアリングの責任を訴えている人に対してもそうすることがおそらくできないゆえに、私たちはいつも失敗しなければならないのだということを示そうとしている。いつかには一つのことしか気にかけることができないゆえに、あらゆる人、あらゆる物について心を悩ませることはできないのだ (ML324)」。

しかし重要なのはこの倫理的な痛みを自らの身に引

き受けることである。痛みを引き受けつつ逆説的にヴァン＝マーネンはこう述べる。一人の人を気にかけるからこそ、顔のない他の人への繊細さを保っていられると。

3) 他者の顔への責任と顔のない他者

「教師はこの子ども、あるいはあの子どもに対して特別な責任を感じることもある。そしてこの気がかりとしてのケアはしばしば『私は彼がちゃんとやれていることを本人に知らせなければならぬ』、あるいは『彼女のことはとくにしっかりと見てやらないと』というように経験される (ML325)」。

ある中学の女性教師が卒業させた二人の生徒のことを心配している文章が例に挙げられている。

「例えば、マイケルとアレックスです。彼らは授業の合間、授業中、授業が終わってから、と一日に5回も私のところにきて話していきました。絶対にさよならを言うてからでないと帰らないのです。私はたくさんのお話を聞きました。彼らの生活で何が起きているのかを毎日知っていました。彼らは個人的なふれあいによって成長する子どもたちです。そして彼らは行ってしまった。誰が私の代わりにしてくれるのかとても気がかりです。大きな、非一個人的な高校の中に彼らと話を出来る教師がいるのでしょうか? (ML326)」

この教師はこの二人のことをとりわけ気にかけている。たくさんの中学生の中で、彼女がマイケルとアレックスのために割いた時間と同じだけのケアを受けていない子ども達もたくさんいるだろう。ある意味では、彼女はこの二人をケアすることによって他の生徒達を裏切っているとも言える。しかし、ヴァン＝マーネンはこの特定の生徒に限定されたケアを肯定する。教師は特定の生徒の「顔」に向き合っていると感じ、その生徒について気にかけているからこそ、自分が責任を負っている多くの、ときに「顔のない」他の生徒すべてに対して繊細でいられるのだと(強調は筆者)。「ユニークな責任に対する感覚に波長を合わせておくことによってのみ、我々の使命が求めている様々な様相全てにおける一般的な責任を専門的な倫理的実践に差し入れることができるのだ (ML326)」。

このヴァン＝マーネンの結論は我々に上の倫理的痛みを引き受ける勇気を与えてくれる。ケアをしたいと願う(ケアを求められていると感じる)全ての人、全ての子どもに対してケアする責任を断念せざるを得ないとしても、ある特定の生徒や子どもの「顔」に真摯

に向き合うことで、他の多くの生徒や子どもに対して
も繊細さを保っていることができると言えるだろう。

ユニークなものへの探究の中に、普遍的なものへの
志向が内在するというこの「ユニークなもの理論」
については、ここで十分な考察を行なうことはできな
いが、あらためて取り組むこととしたい。

4) 呼びかけを聴くこととしての教育学

ケア＝気がかりとその責任とを教育学的考察の俎上
にのせることで、我々にはどのような視点が与えられ
るのであろうか。

「子どもが存在するということは、子どもとその親
を、あるいは子どもとその教師とを、分ちがたく結
び付ける呼びかけを聴いたり、心に留めておいたりす
る何ものと共にあるということである (PD 訳 109)」。
そしてこの「呼びかけ」という働きかけそれ自体こそ
が、親であるという経験において真に我々に実感され
ているものである。「共にある」、この有り体な言葉は
しかし、深い意味をもつものである。気がかりとして
のケアという「心の接着剤」によって、我々は子ども
が今おかれている状況に心を砕き、これからの子ども
の行く末に心を痛める。しかも、「責任を負っている相
手に対して、その責任の強さに相関して気がかりとし
てのケアが深まっていく (ML321)」。慢性の病という
メタファーを用いて表現されもする気がかりとしての
ケアは、レヴィナスの「強迫」と似ている。ケアした
いという欲望は責任への欲望と同様に、完結すること
なく私を駆り立て続ける。しかも我々は、目の前にい
る子どもだけでなく、顔のない他者に対してもケアの
責任を感じている (たとえ責任を担うことができなく
とも、気にかかっている＝責任を感じるという仕方
において)。別稿でも述べたがやはり、気がかりとして
のケアへの責任と表裏一体となっている希望に眼を向
けることが教育学的には重要なのではないだろうか。

おわりに

別稿「気がかりとしてのケア—教育とケアは分離可
能か」において、ケアという概念をその生活世界にお
ける意味から現象学的に分析し直し、気がかりとして
定義し直した。そして本稿で、ケアすることは他者の
「顔」に現前することによって我々に不可避的な、受動
的な仕方で到来するというレヴィナスの議論に沿って
その責任の始源を明らかにした。子どもを前にしてそ
の「顔」を感じたときに我々が責任を不可避的に引き
受けているという点において、レヴィナスの責任論に

固有の解釈の不可能性という問題は齟齬を来さないと
考えられる。しかしそれ以上に教育学的に重要なのは、
「顔」に直面してしまってもそれに応えられないという
倫理的な痛みである。なぜなら我々は一度には一つの
ことしか気にかけることができないからである。しか
し、この痛みこそが、顔のない他者、face to face で向
き合っていない他者への感受性を担保する。本稿は
このヴァン＝マーネンの構想を明らかにした。

責任論に関しては、ヨナスのそれも重要であると考
えられる。ヨナスは、彼の意味での責任を配慮 (Sorge)
とも言い換えている。「他者の存在を思いやり、義務と
なった配慮で、その存在の傷つく脅威が迫ると「心配」
になるような配慮、それが責任である」。「責任の対
象・・・それは原則的に比較的傷つきやすいものであ
る。・・・その対象のために何かが起こりはしないかと
気遣うことができる」と述べている²⁴⁾。気がかりとし
てのケア、その責任とこのヨナスの議論との関係に関
しては今後検討を行っていくことにしたい。

ところで、呼びかけを聴かない、あるいは聴くこと
ができない、「顔」をみても何も感じないということは
あり得るのか、あるとすればその事態について我々は
いかに理解し、いかなる対処をすることが可能なのか。
この問題も残されている。これ以降、教育的な繊細さ、
感受性について教育的タクトの涵養との関係で取り上
げていく予定であるが、その際には池川やベナー等の
看護におけるケアの理論を参考にしていきたいと考え
ている。

ここまでの議論は、大人は責任を担うべき存在とい
うことを前提にして論じてきたが、責任を負える大人
になることを教育の目的とする、言い換えれば自律す
ることにその目的を据えるとしても、人格は完成する
ことはないし、一人で独立して行きていくことが教育
の最終目標ではない。ケアリング論においては、あく
までも人一人間存在として世界のなかで行きていく人間
としての有り様が前提されてきた。それゆえ、傷つき
やすい一人の人間として助け合いながら生きるとい
うのがノディングズらのケアリング論の要諦であると言
える。人を傷つきやすい弱い存在であると認め、それ
ゆえにケアするものもケアされるものも互いに依存し
合うことが前提となっている²⁵⁾。

このケアリング論を教育学に受容するならば、大人
と子どもとの非対称な関係をどう捉えるかが問題とな
ってくる。そこに責任性が生まれると言うことも可能
である。つまり、子どもは大人をケアすることはあ
っても、子どもは大人に責任を負わない。しかしやはり

大人の側にも寄るべなさは存在するのである。親や教師は子どもをケアし、子どものおかれている状況についてさまざまに思いを巡らし気にかける。しかし、子どもも親や教師などの大人の状況について心配する、気にかかるということがあるではないか。こういった課題もさらに残されており、今後検討していきたいと考える。

注

- 1) 例えば、高根雅啓「教育責任」に関する一考察—ヘルムート・ダンナーの「教育責任」の概念を手がかりに—『京都大学教育学部紀要第41号』1995年、196-205 ページ参照。
- 2) 例えば、ランゲフェルト著、和田修二訳『理論的教育学（上）』未来社、1971年。
- 3) ケアする責任を引き受ける原点に子どもや生まれたばかりの赤ん坊へのケアを置くのはノディングズも倫理学者であるハンス・ヨナスも同様である。ノディングズは、ケアリングの最も根本的な状況が自然的であると述べている。自分の子どもをケアすることに関しては「道徳的」だと感じず、むしろ自然的だと感じる。そして、自分の子どもを無視して死なせる女性は、非道徳的というよりは、病気だとみなされるのである。生きた幼児を養育したい、応答したいという衝動は生得的である（ネル・ノディングズ『ケアリング—倫理と道徳の教育—女性の観点から』晃洋書房、1997年、124-130 ページ）。
ヨナスは、責任の根源的な範例を子に対する親の配慮に規定する。「赤ん坊が息をしているだけで、否応なく『世話をせよ』という一つの『べし』が周囲に向けられる」。この「べし」の呼び声は無視されうるし、子どもを捨てたり生け贄に捧げたりせよといった別の「呼び声」、周囲の大人のむき出しの自己保存衝動によってかきけされることもあり得る。しかし、子どもの世話をすべしという要求そのものの「否応なさ」と「直接的自明さ」がこれらによって変化することはないとヨナスは断言する。しかもこの要求は、赤ん坊の「頼み」であるわけでもないし、同情や哀れみ、愛といった感情に帰されるものでもない。ヨナスによれば、赤ん坊の存在そのものの内に当為が内在されている。「この存続があるべきこと、そのために誰かが何かをしなければならないこと」、そのことが責任の内実である（たとえば、ハンス・ヨナス著、加

藤尚武監訳『【新装版】責任という原理—科学技術文明のための倫理学の試み』東信堂、2010年、174 ページ）。しかし、存在の内に当為を見ることに関して自然主義的誤謬であるとの反論がなされてもいる。（たとえば、清水俊「ハンス・ヨナスの責任論」『熊本大学先端倫理研究』1、2006年、146-156 ページ参照）。

- 4) van Manen, Max, *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, SUNY, 1991, p.60. (村井尚子訳『生きられた経験の探究—人間科学がひらく感受性豊かな教育の世界』ゆみる出版、2011年、100頁。以降、原著 RLE と訳書のページ数を本文中に記す)
- 5) 親になることについては村井尚子「親であることの教育的考察—ヴァン=マナーネンの教育学の基底として」和田修二・皇紀夫・矢野智司編『ランゲフェルト教育学との対話—「子どもの人間学」への応答』玉川大学出版部所収、2011年、148-166 ページを参照されたい。
- 6) Van Manen, M., “Phenomenological Pedagogy” in *Curriculum Inquiry*, 1982. (日本語訳は伊藤暢彦・岡本哲雄訳「現象学的教育学」和田修二・皇紀夫編著『臨床教育学』アカデミア出版会所収、1996年、109 ページ（以下 PD と略記し訳書のページ数を記す）。なお、引用に当たって若干修正を加えさせていただいた）。
- 7) 「呼び声は、現存在がおのれを聞き落としつつ世人へと傾聴しているのを打ち破るのだが、それは、その呼び声が、自己を喪失してしまった聞くこととくらべればすべての点で正反対の性格をもっているような、なんらかのそうした聞くことを、その呼ぶという性格に応じて、めざめさすときなのである」。(ハイデガー著、原佑・渡辺二郎訳『存在と時間』中央公論社、1980年、439 ページ)。世人として頹落の状態にある現存在に、良心が呼びかける。そして、「呼びかけを了解することは、良心をもとうと意志することにはほかならない」(同書、463 ページ、強調は原著者)。
- 8) ただし、未公開の原稿『教育的な敏感さとタクト』(*Pedagogical Sensitivity and Tact*, unpublished) ではレヴィナスのこの部分は限定的なかたちでのみ取り上げられている。
- 9) Van Manen, Max, Moral language and pedagogical experience; *Journal of Curriculum Studies*, 2000, vol. 32, No. 2, p.320. (「道徳的な言語と教育的経験」、

- 以降は ML と略しページ数のみ記載する。なお、全く同じ文章が『教育的な敏感さとタクト』にも再掲されている場合には ML のページを示し、内容に異同がある場合のみ後者のページを示す。
- 10) レヴィナス著、熊野純彦訳『全体性と無限（下）』岩波文庫、2006年。以下 TI と略記。
 - 11) 作田啓一「真の自己と二人の大自己」『生の欲動—神経症から倒錯へ』みすず書房、2003年、96-102 ページ。
 - 12) E・レヴィナス著、合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年。以下、AQE と略記。
 - 13) 佐藤義之『レヴィナスの倫理—「顔」と形而上学のはざままで』勁草書房、2000年、184-188 ページ。佐藤は、「ほかならぬ私を他者に責任を果たすべきものとして選んだ主体として」レヴィナスによって「神」が想定されていることを明らかにしている。
 - 14) 斎藤慶典『レヴィナス—無起源からの思考』講談社、2005年、171-172 ページ。
 - 15) 佐藤義之『レヴィナスの倫理』勁草書房、2000年、6-7 ページ。
 - 16) 佐藤は、顔を感じることの絶対的な受動性というレヴィナスの論理における矛盾を指摘し、顔の到来においても解釈の余地は残されていることを示している。（佐藤義之『物語とレヴィナスの「顔」—「顔」からの倫理に向けて—』晃洋書房、2004年）。
 - 17) 小野はそこにレヴィナスの倫理と教育学との不整合性を看取している。小野文生「教育哲学における他者解釈の技法の期制について—レヴィナスとブーバーの比較を通して—」『教育哲学研究』第85巻、2002年、59-75 ページ。
 - 18) 村井尚子、2011年、155-156 ページ。ただし、生来的な身体知とも言えるこの「知っている身体」に関しては、さらなる原理的考察が必要である。
 - 19) 村井尚子「ヴァン＝マナーンにおける『教育的契機』の概念に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』vol.47、2001年、134-146 ページ参照。

- 20) 顔は私に無限の責任を求める。場合によっては私に身代わりの死まで求めることもある（佐藤義之、2000年、9-22 ページ）。
- 21) 「道徳的な言語と教育的経験」においてはレヴィナスの「顔」と責任に関する議論を詳細に分析しつつ考察が行なわれているが、2011年に書かれた『教育的な敏感さとタクト』では、この部分でのレヴィナスへの言及は大幅に減っている。
- 22) セーレン・キルケゴール著、柘田敬三郎訳『キルケゴール著作集5 おそれとおののき』白水社、1962年、33-41 ページ。
- 23) ジャック・デリダ著、廣瀬浩司／林好雄訳『死を与える』ちくま学芸文庫、2004年、143-144 ページ。
- 24) ヨナス、訳 386 ページ。
- 25) 品川哲彦『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版、2007年、147 ページ。

参考文献

- 伊原木大祐『レヴィナス—犠牲の身体』創文社、2010年。
- 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』せりか書房、2001年。
- 熊野純彦『レヴィナス入門』ちくま新書、1999年。
- 小泉義之『レヴィナス—何のために生きるのか』NHK出版、2003年。
- コリン・デイヴィス著、内田樹訳『レヴィナス序説』国文社、2000年。
- サロモン・マルカ著、内田樹訳『レヴィナスを読む』国文社、1996年。
- 屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス—他者への覚醒』東信堂、2003年。

（本稿は日本学術振興会学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））課題番号 24531036 の助成を受けている）

Possibility and Impossibility of the Notion of Care as Responsibility

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Naoko MURAI

Abstract

Why do we care about our children as a teacher or a parent? According to Van Manen, it is because we experience a direct and unmediated encounter with the other. He follows the theory of “face” by Emmanuel Levinas as the pure ethics. According to Levinas, to meet the other is to see this person’s face and to hear a voice summoning us. As a result, we cannot help but responding to the voice. I feel the responsibility to care. However, Derrida says that we can only worry about one thing at a time. The fact that we cannot possibly be responsive to every other who is out there who appeals for our care causes ethical pain. Van Manen insists that this pain is very important in pedagogy. It is because a teacher feels addressed by the “face” of particular students, about whom he or she worries, that the teacher can remain sensitive to the sometimes “faceless” multitude of all the other students for whom he or she is responsible.

Keywords : Levinas, ethical pain, “face”, responsibility, Derrida, care